

紫波町におけるR1～R6年のクマ出没情報（1月～3月）



最新の出没情報は紫波町公式LINEにて配信しています。



紫波クマ通信

11号

発行

2026年2月2日

紫波町環境課
地域おこし協力隊

近藤雄太

出張鳥獣相談会

開催日

2月15日(日)

赤沢公民館

12時～15時

2月18日(水)

佐比内公民館

13時～16時

2月25日(水)

彦部公民館

13時～16時

3月5日(木)

長岡公民館

13時～16時

2月のクマ情報

1月～3月の間、基本的にクマは冬眠をしているため出没が確認されることは滅多にありませんが、今年は全国的に冬眠をしないクマというのが話題になっており、紫波町でも1月になってからも紫波サーブスエリア周辺でクマの痕跡が確認されています。

今の時期はクマと遭遇するリスクは非常に少ないですが、ゼロではないということは覚えておいていただければ幸いです。

冬に出没をするクマは場所を移動するためなどの理由でたまたま冬眠穴から顔を出してきたクマか、冬眠をせずに餌を探しているクマのどちらかです。前者と遭遇することはまれで、すぐに冬眠に戻るため出没が続くことはありませんが、後者の場合は山にエサがない季節であるということも相まって、人家周辺に頻繁に出没を繰り返すことも少なくありません。

この時期にクマが餌として狙うのは木に残っている柿の実や家畜用の飼料、保管している米などになります。クマと遭遇するリスクを減らすためにはこれらのクマを呼び寄せる誘引物の管理を徹底し、クマに餌場として覚えられないようにすることが重要です。

また、来年度の春には今年度の秋の罠りが少なかったことからクマが人家周辺に出没するリスクが非常に高まる懸念されますので、今のうちから誘引物の管理を見直すことは今後の被害リスクを抑えることにもつながります。

クマの出没が少ない今の季節だからこそ、身近なクマ対策について見直す良いタイミングではないでしょうか。

クマの出産の不思議

クマの出産には不思議がとてたたくさんある。クマの出産はちょうど今、1月～2月ごろに行われるもので、冬眠の時期でもあるため人目につくことは滅多にないからだ。

まず、クマの交尾の時期は5月～6月ごろで、出産までは半年以上もの間がある。なぜそのような間があるのかというと、クマは交尾をしてもすぐには妊娠をしないためだ。着床遅延と呼ばれる一部の動物が持つ特性で、受精卵を着床させずに体内にとどめておき、冬眠前に十分な栄養を確保できると妊娠して出産をするという仕組みになっている。冬眠中の出産というのはクマにとっても非常にリスクのある行為で、十分な栄養を得られなかった年には自らの命を危険にさらすことをさけるために妊娠をしないという選択ができる非常によくできた仕組みといえるだろう。

ちなみにクマは一度に2頭子供を産み（稀に3頭、4頭になることもある）、生まれたばかりのころは500gで人の手のひらに乗る大きさだ。

クマの出産、子育てについてはまだまだ分からないことも多く、今も研究が続けられている。



今月の話題

クマを食べる
クマを利用する

ジビエといえばシカとイノシシが話題にあがることが多いが、昨年はクマの出没が非常に多く全国的に注目を集めたことでクマのジビエ活用についてもスポットが当てられた。

クマはシカやイノシシに比べれば捕獲数が非常に少なく（シカ約70万頭／年、イノシシ約60万頭／年、クマ約3千～1万頭／年）、加工できる施設も非常に少ない（全国に602あるジビエ加工施設のうち38件のみでそのうちの30件は北海道）という現状にあるため、クマのジビエ利用は限定的になっている。

とはいえ、クマのジビエ活用にスポットが当てられるようになったことで今後は拡大していくことも考えられる。また、普段はなかなか食べられない貴重な食材としての需要は今後も続いていくことだろう。

クマの利用ということについては何も肉だけに限った話ではない。毛皮や爪、臓器なども昔から様々な形で活用されてきた。

例えば毛皮は防寒性能が非常に高く、防寒着やマットなどとして活用されてきた。防寒着としての利用は近年では稀になっているが、一部地域では尻当てなどに加工されたものが販売していることもある。爪であればキーホルダーなどのアクセサリー類に利用されることが非常に多い。

臓器の利用として最もよく聞かれるのは胆のう、俗にいう熊の胆（くまのい）で、古くから万病の薬として知られている。

クマという存在は近年身近なものになりつつあるが、クマの利活用についてはまだまだ身近といえるものではないだろう。奪ってしまった命を無駄にしないため、話のタネづくりとしてクマを食べたり、商品を買ったりしてクマの利活用に触れてみるのはいかがだろうか。

